

最新事情

高校編⑤



桐原宏史校長。
[37年ぶりに郷里の学校に赴任しましたが、昔と変わらず皆明るく穏やかに高校生生活を過ごしています]



現在の校舎に移転して50年がたつ。
近辺にはJR北陸新幹線、えちごトキめき鉄道が走る

**3年間のビジネスマインド醸成で
地元産業に貢献する社会人に成長**

新潟県立高田商業高等学校

(新潟県上越市)

新潟県立高田商業高等学校は、今年度で創立107周年を迎える上越地域唯一の商業高校だ。毎年約4割の生徒が就職し、地元企業からの信頼も厚い。「一途一心」という校訓の下、ビジネススキルを身に付けた勤勉な職業人の育成を行っている。資格取得も推進し、「課題研究」で3年生が秘書検定2級に挑戦している。同校の取り組みについて伺った。

地域と連携した商業教育で スペシャリストを目指す

新潟県立高田商業高等学校は自然豊かな雪国にある。学科は総合ビジネス科のみで、約400人の生徒が簿記やビジネス基礎、情報処理を学んでいる。生徒たちは3年間で未来を主体的に切り開く職業人へと成長していく。

桐原宏史校長は、「本校の生徒は皆優しく、純朴素直。粘り強く勤勉です。地域の企業の方々からは、『高田商業の卒業生は上越市の産業に貢献してくれる』という期待と評価を頂いています」と話す。

大正時代の創立以来、地域経済の発展を担う人材を数多く送り出してきた。全校生徒が上越地域(上越市・妙高市・糸魚川市)の中学校出身

だ。毎年4割近い生徒が就職を選び、主に地元企業の事務、販売、製造職として活躍する。進学を選んだ生徒も、その多くが近隣の大学や専門学校に入学。最終的に卒業生の約6割が地元で働くという。

同校では、系統的に商業について学ぶことでビジネススキルを身に付けた勤勉な職業人の育成を目標としている。教科の垣根を越えて教員が連携し、商業科目・キャリア科目・生活指導を通して総合的に指導する。

入学したばかりの1年生には、商業科目「ビジネス基礎」であいさつやマナーをガイダンス。同時に4月から5月にかけて、学級担任をはじめとした全ての教職員が、生徒一人一人に言葉遣いや入室時のマナーを指導する。最終的には3年生の商業科目「総合実践」で、社会人として必要な言葉遣い、電話応対や来客対応の指導など実践的な学びの機会を設ける。また、地域の社会人を講師に招いた講座を複数回実施するなど、地域と連携した学習機会を設け、コミュニケーション力の向上を図っているのも特徴の一つだ。

代表的な活動は、模擬株式会社「Rikka」の店舗経営。昭和26年に設立された六華商事に起源する伝統的な商業実践活動で、全校生徒が株主となって取り組むものだ。平成17年からは、活動の一環として夏季に上越市内の商店街にチャレンジショップ「Rikka」を出店。生徒が商品の仕入れから販売まで担当する。そ

(左から) 商業科目を担当する小形恵子先生、小林直也先生。
「以前講演を依頼した卒業生が、当時の『総合実践』の授業ノートを大切に持って来てくれて。うれしかったですね」(小林先生)



商業科目「総合実践」の始まりは
礼儀正しいあいさつから



学生の気付きを大切に 3年間でマインド醸成

今回は3年生の商業科目「総合実践」を見学

の他、3年生の選択科目「広告と販売促進」では地元商店のCMを制作する。
「こうした取り組みは、ビジネスの現実の姿を学ぶとともに、学校では得られないさまざまな世代との人間関係づくりを学ぶ機会と考えています。生徒には、自分自身を育ててくれた地域や社会に貢献していく気持ちを忘れない人になってもらいたいです」(桐原校長)。

した。この授業では教室の半分を東京、もう半分を新潟に見立て、3人一組で商社経営のロールプレイングを行う。この日の業務は決算。生徒たちは1年間付けてきた帳簿を点検し、簿記で学んだ試算表の意味や日ごとの記帳の大切さに気付いていく。

指導に当たる小林直也先生は、「本校では1年次に簿記や情報処理の基本、2年次に財務会計の応用を学習します。そして3年次にこの『総合実践』で今までの知識を生かして実習をする。教員が何か教えるというより、生徒たちが自主的に取り組み学ぶ環境づくりをしているだけです」と話す。

基本的なマナーや一般常識もこの授業で実践し、自分のものにしていく。生徒からは「普段教室で顔を合わせる友達も、ここでは同僚や取引先です。社会人らしいきちんとした言葉遣いでやりとりしています」という声上がる。外部の講師を迎えて社会人講座を行うときは、生徒が自らお茶出しを担当するという。

「お客さまに対してどうするべきか」「この仕事をどう進めていくべきか」を考え、判断し、行動する姿勢。本校のビジネス教育の特徴は、こうしたマインドを時間をかけて徹底的に醸成することだと思います」(小林先生)。

現実の実務では、口頭で指示を受けることがほとんど。そのため、「総合実践」でもあえて板書はしない。生徒たちは日常的に、聞き取った内容を自分なりに解釈してノートに書き出す

訓練を行っているのだ。

指導の際には、正しい立ち居振る舞いと併せて、それらが持つ意味や背景となる知識を伝えることも欠かせない。例えば面接時の椅子の座り方とともに室内の上座と下座を教えることで、生徒が「そういうことだったのか」と納得し、知識が定着するのである。

授業開始から3カ月後、夏休みに入る頃には、元気にあいさつができるようになったり、言われたことに対して自主的にメモを取れるようになったりと、生徒たちの行動が目に見えて変わる。

生徒も自身の成長を実感しているようだ。授業後は教員がノートを回収し、一人一人の理解度を確認する。そこには「ただお金をもらうために働くのではなく、相手を思いやって行動したい」「電話応対で、相手に聞こえるように用件を伝えることができた」と、意識の変化や達成事項が書かれているという。

「課題研究」で長年導入している秘書検定も、ビジネスマインドの醸成に寄与している。

「基本的な知識技能は『総合実践』で身に付け、秘書検定の対策は『課題研究』で問題演習を行う。二つの授業で連携して取り組むイメージです」(小林先生)。

秘書検定の授業を担当する小形恵子先生は、「どの教科もそうですが、気付きがなければ自分の学びになりません」と話す。授業は過去問題集を用いた演習形式で進める。教員は質問に答え、各種参考書を教材として渡す形でバック

最新事情 53 新潟県立高田商業高等学校

アップする。

「生徒たちは秘書検定の問題演習をする中で、『深掘り勉強』の必要性をだんだんと理解していきます」と小形先生。就労経験がない高校生には、問題文からビジネスの場面を想像し、判断するのは難しい。そのため、「問題を解いて間違ったところを書き出す、解説をしっかりと読む、関連テキストを参照する」、こうした「深掘り勉強」に取り組む中で、生徒たちは自分のミスの原因に気付き、分析・対策するのである。これによって仕事をする上で欠かすことのできない、「未知の事柄を学ぶ力」を自然と身に付けていくことができるのだ。

お客さまのためにできることはないか、気付き、考え、実行する。こうしたビジネスマインドを生徒たちに理解してもらおうべく、教職員が一丸となって指導している同校。これから社会に羽ばたく生徒たちに望むことは何だろうか。「卒業後それぞれの道で、先輩にかわいがってもらおう。社会に必要な人材になる。仕事のやりがいを得る。こうしたお金では買えない価値をたくさん手に入れてもらいたいです。『あのとさ、高田商業で学んでよかった』と思ってもらえるよう、日々指導しています」（小林先生）。「本校の校訓は『二途一心』。ひたすら、ひたむきに打ち込むという意味の言葉です。自分がやるべきことに対して無我夢中で頑張れるたくましさを大事にしてほしいと思います」（小形先生）。

身に付けたビジネスマナーで未来を切り開く

総合ビジネス科3年の中村葵さん、白鳥結衣さん、佐藤有里さん、小川蓮生さん、藤井真之助さんは令和4年11月に秘書検定2級に合格した。佐藤さんは「高校生のうちに面接での振る舞いやビジネスマナーを学ぶことができました」と受験を振り返る。藤井さんは受験のきっかけを「上司と話すときや取引先に行くときに、検定で得た知識を役立てたいと考えたからです」と話す。中村さんは、記述問題に特に苦戦したという。「データに適したグラフを選ぶ、文書を訂正するなど、回によって全く異なる問題が出題され、対応が難しかったです」。

卒業後、白鳥さんは医療系大学に進学、小川さんは製造業に就職する。二人にこれからの目標を聞いた。

「進学後のアルバイトや、目上の人と話す際に役立てたいです。いずれ社会で働き始めたときに、検定で学んだコミュニケーションスキルを生かせるようにしたい」（白鳥さん）。

「入社後は組織で一番下の立場になります。秘書検定の内容をフル活用できる立場です。自分の得た知識を全部実践するような気持ちで仕事に臨みたいです」（小川さん）。

生徒たちはさまざまな気付きを得て成長していく。在学中の指導を胸に、卒業後も自分の未来をたくましく切り開いていくことだろう。

(左から) 総合ビジネス科3年生の中村葵さん、白鳥結衣さん、佐藤有里さん



簿記やビジネスマナーの知識を総動員して会社経営のロールプレイに挑む。デスクや電話が並ぶ光景は実際の企業さながらだ



西城商事株

東城商事株



(左から) 総合ビジネス科3年生の小川蓮生さん、藤井真之助さん